

## 一般演題9-4

### 当院における高気圧酸素治療の中止人数とその理由

小川 駿<sup>1)</sup> 平井 誠<sup>1)</sup> 加藤晃典<sup>1)</sup>

遠藤汐梨<sup>1)</sup> 村田純一<sup>2)</sup> 齊藤久壽<sup>2)</sup>

- 1) 医療法人 札幌麻生脳神経外科病院 臨床工学科
- 2) 医療法人 札幌麻生脳神経外科病院 脳神経外科

#### 【はじめに】

高気圧酸素治療を行うに当たり、患者負担の軽微に努めているが、治療を中止してしまう場合もある。当治療室は年々患者数・総治療回数が減少しており、治療中止患者の増加がその一因と推測し、2014年から2017年までの4年間の治療中止患者数とその理由を調査したので報告する。

#### 【背景】

当院ではSECHRIST社製第一種装置を6台所有し、2000年から365日24時間体制で毎日治療を行っている。2018年4月の診療報酬改訂から全疾患の上限回数を10回としている。

#### 【結果】

治療中止人数は2014年91名、2015年82名、2016年69名、2017年61名の計303名であった。中止理由の内訳は耳痛・治療拒否・不穏・急変・転院・OPEであった(図1)。治療中止患者の疾患別での内訳は4年間で303名のうち、脳血管障害が180名、脊髄神経疾患が105名、その他の疾患が18名であった(図2)。

#### 【考察】

各年の比較では、患者数に対し治療中止患者は14.6%(±0.9%)であった。治療中止理由の約半数は耳痛・治療拒否である。経験的に1~3回まで耳痛を訴える患者が多いが、高齢の患者や意識の清明でない患者も多いため耳抜きを指導することが困難な場合が多い。当治療室でも耳痛による治療中止は一度問題として上がっており、IC時に耳痛・耳抜きに対し意識に残りやすいような工夫を行うようにしていた。しかし、今回の結果から、その効果は得られていないのがわかった。当院には鼓膜穿孔を行える医師がおらず、以前は隣接していた耳鼻咽喉科に耳痛に対し対応していただいていたが、2012年に当院が移転したことにより、

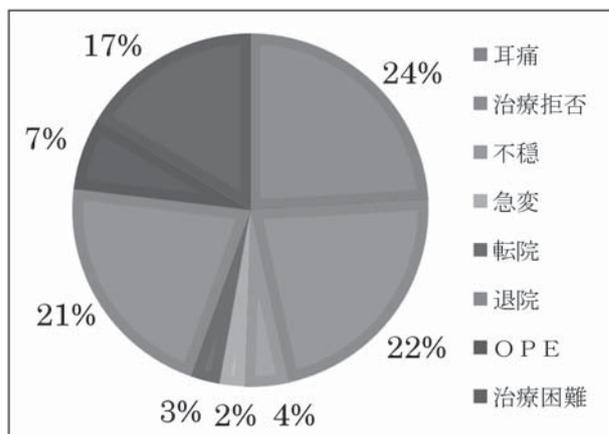


図1 4年間の治療中止理由の内訳と割合

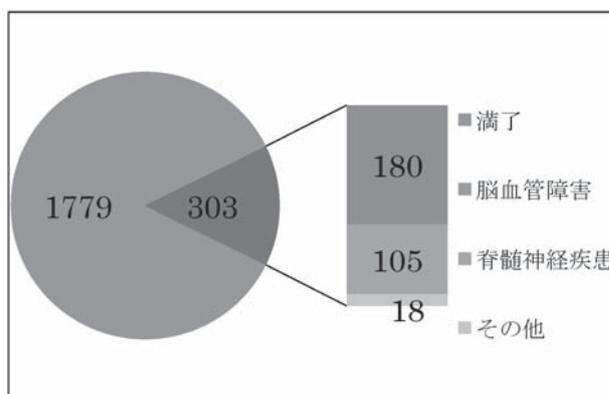


図2 4年間の治療中止人数疾患別の内訳

それも容易でなくなったのも要因として考えられる。治療拒否に関しても、治療時間の長さが苦痛・暑い(寒い)・圧迫感があり息苦しい等が聞かれる。対応策を練ることにより、治療1~3回までの耳痛を改善し、安心して治療ができるよう患者個々の要望をある程度満たすことができたならば総治療回数を増加できると考える。

#### 【結語】

患者数にかかわらず一定の治療中止患者はいることが確認できた。今後は治療中止患者の減少のため今まで同様積極的な治療を行っていくことに加え、安心して治療を継続できるような有用な手段の検討をする必要がある。